



筑紫再行：天





神皇正統記

筑紫よりいでせむとて出立つは四月の朔日か
うさるハ宗像大神ハもそやうなりこの皇学
のるふつきてハ朝夕おそきハ法を承ふりなる
るあむ多うりけれハ何れの神をおちろりと思
ふハまじとハ邪れども殊お祝ハく刺つらう
まじ神よりてまじ其ハ雲を仰ぎなれりけるハ
りふろつて身ふらふらふらふらふらふらふら
まじのふらふらふらふらふらふらふらふらふら
ゆふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
こハ五年はあハ七嘉元七年と云ふハ思きてさふ

。

。

お宿をれりけるを其後のむあむたと一へあき
ものおハあ終りりり故去年の冬ハ有る由社
を作り改め仕をれりける二月の十七日と
云ふ移ろハ一なる世治むと花山院家より作
らされぬバいよくえをまわしく思はれ
るを又廿十一月の十四日お劔とむとよ筑紫お
あさめをりてその後と令せてこの程の終末をや
うく五年おして之をお奉りけるふこと一の
を正月の五日よ市ハ一あり終りくと云おこ
せありけ程ハ瀛海島より蓋金の由雲形を記ハ

るもつきて中はまはあまよりいとよめるあま
あきる一共とゆるべ一四月おハ必と云るふ
いのうたねて出をむとするふ去年より移ると
も云あさよあてむよりおあるるをあ人ニ云出
来れりける一おハ或人おハ一らの念をゆぐね
あかりるふらハさざして家いと云一きと二お
いふ因はと母ハあねのりおよりてうるハ一
ま中たえとるとこおハ一と判と云の力をせ
くたるとささぎあてこねはは法の母のあむの
若しあせおハ一あまことこれのりあてさばら

梨の味ト何一カ一もいらあつるもが
身あるしむうしりけえまがくしきんやうじづ
らひいてしハ味めはらふをれいじハえま
うでせしむと親孝いふむのハむおて人し控
ぬ物思ひあてくくしむをさるおてもあやし
まハ三月のホ 日ハ後海ありハ母もさばりり
ハかぶしめさずいうあるもの有むあもサぬれ
きぬありけるよしをりて云清てむと重俊のハ
とよりち来り又思ふあしハハ阿さざかけぬど
て記本午を取するあひて五十金むうりハやう

くうり来りて旅のよろいもあどくふお本べ
くありハくお角のるハさくふむもろくづき
あどの子らハとどかつとむるはぎの私のとぎ
おしぬおむづきてえねハかーあき物思ひと云
あのおてとふもろくわも後の人の言ぬお有ぬ
べきと思ひあうて廿月のまつうことありて
ハ旅お出をよりあハあきさあおあ終りけれ
ハおのほむハくおあハあけりとしさるお
出とべく女はうぎをうつくしものし四月朔日
あむ門出する何とハあ控りけることびハし

おろりりて

白雲をうきよむしむらさき花のあしあせ不之
ぬらも光るむやくこちしてきかみの山雲飛ぶ
も思やわなまふもいもうらしさを重畳と十三
ふふ花にば一室のゆやどりあで送まむむとい
さめふたさすがおれゆめうりうけらあやとら
けしこし

子孫おつとへんとての福正たるしの子ゆえ
いさむらふうも千本貴良あど送らす供人ハ田
村中衛と従者某とありかき細借もよちルてま

輪おでえ送りておとあるどす取川より父子共

ふらであのりて川崎ふある雨りしく降る

二日晴着るふ送る人こそうへてうへーやるふ

さすがふらへりえのこせし積るえバ

うらむらふあせせて常おえあかき我子ハ

ぐこめもーきりがつかま金川おりのまはこし

運美の交易の場あかきまきして

世中の人のこの様をえとーふ所えさせル

らしと

内外のぬちめも何も久良波守之玉のことの

うしとふるまひしむみ塚にてまむすぶ

三日二宮村ある吾妻社よびらぐ

こうろくと云はらうこし熱れどもうろくと
やせばしこしきりく津湯本ある福住の家おつ
く去年より契りしる共みり控は夜泊御十二
き下ろす大し阿ふしすりきも従者もこのご
ろ見しこし悩めおしをく湯阿て本のご
とくお終り

四日おおらまごりごと云のあて送くる三崎社
よ訪しりるふどほ名の行るとりらるもしら

すしそをさうつりらるおほ者いし先ありと
思ひて若原おまれるよきしてはほふやどる
べりりしを五里むりりもや行るこるくむいと
ことあし

五日岩瀬おて尻りとむ由比あてま御美辰が舟
後久英侯よりうへりらるふ久あてまの阿るト
せし水ぬりまの五里むりりの行るおくハル
ふハるの申あて阿ふぬりりるをこしあてお
阿ひとりらるおぼおてこり或後よりりの侍言も
よくいひたのり終るまバ人の阿やまもちもとが

むべきふい何しぎるものありうしとそふん思
てしほむらひのまのこふとせし

六日掛川おあむ

七日阿久井ある高は氏ふつく蘆根葛根一人待
ありりといとく候ふ此あそるもしめてあはる
くあれども五年阿久のた雪は葛根お云をぬ
うかりるるのありるを候ひてくハくの米路
をこの所中お施しうりる人あるがなるを云
よらじびて二人ともふおのれをゆめぬ何がま
してしういぬもしきりあむとせし

八日雨ふるりの四日9日の子あうくあうらバ
りふいぬれつてうたおのほをいしむるべうりし
をさうことハ神のは助おしすすこくあして
うましきをあむのこくむるを幸ひよきを休
む葛根がこへる画の賛お

大おへのゆふいおらさすく思ふや神の目あ
けしうしこおりの京一編有まは厳とぬぬて
大立日法まといづの加うて神七幸ひや夜
くあるむむい後神をこく飯田・田代
あじ来る

九日一ひて止めて浦役をこふ人と申うてこの
地誌社の地を見まわつてむらむらこふおのち
るべき事あるを言ひて平がらをいひのり又信を
ことし一ひとちふつきて言ひていせしこあり
この地を後と云の中少く殊ふ人この地といひ
ありける所あるこの地震よりこのころ人この
たあし入るはかりてうらむむいとらすし
しるあつ浦役におふる人と十二三人あるはめを
を

おふるるあつしやい祝
あせとあどう 阪むむ大急のり世はとこ世の
やまといまねを
十日出立つ人多く送りす吉田あるお田村氏
をこ一るお侍のちこびて出と申ふ人多うり
けごろりのあつしは後が越田氏のあふめさしを
ぬるるすをちとらむもたむのりるおあせ中
いとささかさまけちり見申紀傳十四巻四冊を
らす
十一日人多くあつしを。おあつしめのおあつし夕さの

。 七。

ハ文庫ありて祝詞式とく扱ふ入て人々多く川ま
で送り舟水々こまひの船ハ意以のうりふおて
服部 ありのありあり積次船出す
十二日吉申の海をさしりて七の所あも有る
心二己浦あつく浦お出で身ろぎす

身ろぎしして清き心を妻あ子おたぐへむとて
う宗思ふお心いこよひハ二己おとある
十三日己浦の日の出ぬとまむむておづ水ろぎ
すて原いとま〜晴〜行
二之の浦ろふのまろふと〜ひますはろけ

して思す非孫福氏あり〜水ろるふ奥山林の
山雲と非廣ふとをさづろ〜行こり

宗もえむ我あさつくは矢乃常非の幸むとが
宗の非ハねえ徳苗田守室おどまろて大おもの
がとりすさてこの一所までこまひ人をしづめて
おくこ程むろりのものをごふおべきいとあま
まハ旅ハいとあきあめのおあむ

十四日己浦あり〜船ろる 宗のろ有る美え思小
非業とろをまろせあろ水ハ非供をこてあり程
ろあろのえ〜あもとあ〜まろめろりてろ程あり

おしるるをうふして玉井又た門服部侍ハ
お係せつくりま何うすべきや一をうとるひ
て金と函を何づるかくも井へハ百足論ハるこ
よひ山平の隣ありる人おのれが社をいと
あこつううなるふつりてハるごバくの金をも
とりるものといひてハる多くうりお来うて
何おがちおせむもうるさ一やおのれが業上
たのしき事ありり終バころころバくのもの
をも出して社をち一さなるおこそ何りり終
いうおぞせむいごづうおおるふつうすべきは

ありあむや大和のあの人情に終りて思やるべ
し
十八日大香山におくりむを社におまうてし五條の
陣屋ふつくこの内若忠懐ぬ一を年の六月十九
日おもてし水とりりるまエカ日ハころころのこり
お終りりるが廿二日ハうり陣屋を引い
ひてはたお出をさあうり終バあめ終まあちつ
りころつハ悦びろつハ女おのあハをのへ
るふむおきおしきゆさううあるふあうる
十九日ハ年終におまうづ名物村ある名物社ハ

まづこの所の本久幸と云ふおむ内方た徳と
りかくつき所ありし終ばまづづ思ひ出るる多
くあり所より旅大お出で例の高畑と云ふ終
氏て皇の天所又なる之輪うつくこりぎして大
神社おまうでなるるふハ甲子あり

廿日大和社お訪して内山よりふよこえ幸と
るの島おねおたをうへて神劍を 大社おなるこ
終ば七年バウりああるか若細後お作せつく
しめたりるるあるを年ころ家おいづきせり
るるお同ドくいとてさくしなる終徳のつゝこ

の跡を多くゆいせこりいとさるーや榎本ある最
田若をねくをゆりち市あるお浦之政をいざふ
ひて事おらやどる清水茶とまうてぢもすがふ
大和の田地の事おどころる

廿一日もる社をぐこめぐの本海よりお出でハ
幡におうで信より竹田とてお出でるおハ
山院殿のゆめあるお田若政がりやとる梅戸は
も年終てを年神社をつらうとまらるる
ーハさしありこさひ 田若がまよのわくはる
おどのりともむゆくまどうとるふ日出して終

本千五百の文来る

廿二日内の取らりたをりてうつらるふ西
村氏本控りいしういいて碓川ふやどを
言めて急ぐ家あり十と出てふに年る純二
も十四日ありいよく入家のありして
る庄田芝憲より三月三日迄あり二月廿四日
ありあり廿一日田村より三月廿一日出もて十
二月之十日ふむせり一栗田のりものうこと
来し何れも人くあわすありきあり一とおこせぬ
かり終はもある津の地とらへあひまふる

子ねりるぬ田地之月部の出もて年終のう
の礼いひ来れりこよひ内一のうへり言いた
む

亦三日ふい身ろぎして 宗像ツ社よをド
てまうでをり新まをがとす又家もて出つら
うまらねり一寶劍一ふうを納まうせし
を 前内府殿ふねぎてさしげまねるふゆよ
くうべあいせりうすし和田よりませり内
侍所あうてなる習あり多すものあも出され
ていつく阿トせしれり西川要人新えをあり

ふたんざくをしくして送る 浄慧の目を
こまひる 前内大臣殿よりめいふありてある
浄慧のゆきあつきてくさぐさなき浄慧かひし
あして浄次あてははは銀をこまひる 藤戸純行
宇前おそ門守石川伊豫守文阿るトあり和田氏
配膳をつとめくる 家おふこしくむるふ
の役びをきらせるともおふろこばせむとてお
う 大瀬田村芝芝の人こふろへりしめふこ
く 於本千本のうへりことと井も云送るべき
ども何又事家のゆ内このゆきむろふいひ

送る出を家おでしくむ

十五日てまよー明日京を出さむありあふ
宗像社おまうでまぬく千種左ね殿おてまゆよ
うれとる伯家の有切橋着押のしるしをうく又
はとびのゆきふつきて西島の子どもおこる
あるゆきをうらひせ夕へるも奪しや式部
おそめて阿ふ 津まあてけごろおとあし
奏儀もそやうなりらるとりませ表をいしゆむ
をういやくさせあひしゆきをせせるル
をふ思ふと係下をねらるとりやくねりか

廿九日大坂を出ると五島ありて控バキのふも
多りし文京小送らせつね田氏小をよりて有る
越と云より〜伊予米谷村河巴小福壽山とて元
山阿の上小松七松阿小祠こ〜小をせぬへ
るが故に小いさ〜もあ〜伊のミキと
めをとして人小あ〜る即中山寺の傍ありて控茶
む年ころ尋奉りしる福徳山ある可うりる
米谷と云各ふ〜る〜いあり山これぞ昔のい
ふくらの山と云ふつく此所もて伊のまが子を
石崎がわ〜るひつらハす

五月朔日丹波小多紀郡より〜ありる小味万村
と云阿〜るこ小岩まどり神社とてわ〜しす
こ阿〜式ある櫛石憲社社ある〜くおが田必領
時をこえて米部〜る市島ふつくこの〜りの
あ〜る大き〜るつ報河の如く〜ていとむと
〜〜着るあどおとせま〜らバとわぶわ
二日竹田と云お〜ま大坂井と云ぬ〜いづ程の
味も〜良ぬ〜伊都岐神社細村才田村の
ふ阿〜村ハ齋の字あり阿やま程るめて本い
つきのもや福知山よりぬめて丹波小加佐郡子

宇あつくに於よりふぼく山ごえあの傍ふいせ
のあまふりーの吹草あうでさるる

三日まはようふをうけて岩波ふらくる天橋を
お上りてま帰るをえつ

こころをよそのおれをいそいでとよさうのあつたつくるま

天ろけるくーのほのほおるさーことこの不
るおつくろく毛丹は即めてしりて大よき神社

とみ井津社阿方みの傍あれどもゆくさきいそ
い陸あうり控ばえまうでまうずおる村田中氏

めてまのめものーとめて申候さうりあや久美
片ふる移築を訓うり九年をへて善くおふくる

よでのものがらうり止すておむ

四日てまあー西垣小右衛門伊佐え就移築仁糸小
ち所懸まほほ梅ゆきおを敷也くお来る

五日誕辰ありり控ば津谷津社ふあうてーとが
家の林をねんころふねとなりあ子のとめお幸

うらむとを祈る移山飯所と云るる人けなどに
戸小立べきしすて四月五日其父ま御受儀小

送けるとをさるほ食のあうけ有りかお控ど移
築まうらふのほながひせんの焚ありり控ばう

へる人と共小移築お懸まがあり一町甲山のふと

おゆきて

山水をいづすむむのののとして幸いふ神の
うまをぞおすふ又擡周

もどむらハ夕日のをもふてり合てはふ云と
る相うげもあし又こを隨主飯と号て又額を
もろく酒舎のまけきくありて夕さり祀ふ
てこきうへる又三日お整るる田中お存あり
とめふ

神さひていふえさし
しひ家のたまの未
が云くりさうえむらふ宗よ又出て福山敏印お

阿とうふこよひ又人しとうとほ

六日雨ふる人このとめお例のうく夕さり侍は
正月の許おまねうるはふ人ハ右訓英外を左次
市七にふそを市仁三市あり後ふりてうへる約
山敏印は作せて京よをとりしを印符を神を以
てりありしむ宗お文をいす

七日神宮神社おもうで、天橋をあげえつるま
婦をを冊後おの印をとして正をよりおはるハ麻
ある西村亮亮がりをりてハ本おこあるこの
辺但了ふま又郊あり

八月二方郡田村にお宿ることしよりハ廿七年阿
ふとお十日むりりかや宿りルむを今ハあるへ
もすれありル終バとぶらハす山乃いとけハし
九日因幡鳥取も宿る山乃次乃いととづらハ
一午後雨ふる

十日大草郡お小山池と云ありありハ茂の才
をぬくひ一水門あるよやす物お茂大郡の社
ありとさうきし〜でるるいと本まお一宿替
お河村郡も宿る山坂十六次乃十六阿り
おやと云はうりあし

十一日ハ松野赤崎子三宿は止む非おハ一おす
よまうてなるゆ所と云所の上方名如村あり鳥
鳥とこ内出でて一のバ一き中多うり送りよ
る

十二日米子あり船うて粟島おまうてハ雪を
えたる榎夜神社よまうづねらうりあうて完乃
よえく

十三日よべより雨あし旅やくありがとめころ
しハハ昔しうり終バ此後人のあうりる
神のあいの雨あうり終バ人の後びハ日か後び

平園より
二刀を大社
お納奉り重
備孝純への
行ぬえ

てすくくと出立ぬ山社社まきうて、
未付つくぬくハ平園稚足の家あり
京あり中山
を西も来うて阿小三月十日家より
送れくハ
やを^{アサヒマヒ}致ぬの二刀も忘て阿り
十四日早より二刀のり笑つらうまつ
らせん伊
那依小後よ出て才際す阿す話むと
ての阿らま
しふり千宗ふさし言孫君は君あり
阿あいきて
ゆくまゆめて對面阿い返木或海さ
くを望する
るをへて管直阿り中山や中
あはら相伴あり
ハや衣と云を端

ハる

十五日まゝ我り川よりて才際して
大社おまきうて
なる樓門よりをがこまゆりま
あみて内院お入て
水石をたあハる中山を再と
とあ小未社をお
こぬぐる

皇都のまつきささすむ
ま新土おせとあもて
こくりりり千宗殿あり
水使阿りて望角をゆハ
るルふハ歌うくこすむ
中山ニ往きをしとふ
十六日就まきうて
す中山を再しと看候る
はまき
あのかと小振るる
阿を梅と魚あど阿る
とせり

十勝の哥よむ又出で大社の哥よむりふも千家
の歌よむ佐と次し函をい使ひてハ田知花よゆハ
るべき身をせしせし花のうづ之ニ田をゆハ
こよひ呼同好見よゆ鯉のせづくりをむて人
と共子大に阿へいふ島を老重胤度信右仲依
と次し函おど共こ大もものごとりす
十七日や五とよふあやうですがきと云ふきを
ゆハるすべてりこもま病ハ大こしるし何
るものし佐藤園を小島を信右永芳人あと来る
千家の信右何ふべきやういふかこせし終るる小

よりてゆく借人ハ口ハ前社小代系させしりこ
よひ 五世村築ちふ社 宗像大社の以祭つり
うまつりてハやをてを申しやをてあ妻せさせしり
宗像の時川の海の家の子をこよひのあひりありのね
よやすむいふ思やうなるもいとやこしりし
十八日朝すとき小大社あやうでまがりて出とつ
やをてをいしぬ人こまじり社ハ多藝志社社あて
本る南松山あるハ東水は信時宗社社信時あて
うてとりつる小依と名をまうて滑杖あて送る
むと云ふ信時信時ハ信時武田掃部常樹の

宗像の歌
三つの支
八月十一日
白石よむ

の海よいさふふり終り滑狭社よりづ川の
中も十五万幅幅一丈八寸の滑石より
中も岩坪大小五よりけ中も在る小石あきり
ありとて多くぬはる奈貴佐社奈貴佐社の
か洪水の後奈貴佐社奈貴佐社の合せあり終りと
てありづ

るこ終りあめづい此より波か佐山と云ふ佐
か佐社式も佐佐社と云ふ字を下上も洪水
よりしすを待待社として佐社を大社を待連とま

へりし終りといふ

あめーいとのくすいなる岩坪も社代り
阿とももえるぬり終り人こも終てて立村
も出つ風土祀も福ゆる大門立村も終あり山よ
う山をこえららくして須佐も玉り須佐も造の
海もやどる俣佐考いしく候るす大社のう
こととて長短二ことと云ふ

十九日須佐大もあまうづ本も素子別まて照大
船もあ和五男もぬ終あり陸丹河りいとくすき
あめし終りしひてとくもとりとともああいを

廿三日乃のちどもいよいよ洋あふざりり終ども
行先いづく旅より何れかひひて出きつと名郡
若谷と云何とりふまうりるちど雨いよくい
しふる上下と云ふうまやをへて向腰村と云
ふいとり阿やしき家よまむすぶ女とむしきた
とへむおもものあし

廿四日府中よりうごめて福山よむるふ所と水
阿ふれて一二里もどりす雨いとしとどしふる
てうごの中あぶらぬきとて笠岡所と云ふ
ある新井飯多豊より松本とふらばと云をこいせ

ありこむい又光善と云ふ由く函あど出して
いとくあるぞす

廿五日誠之館より日本紀の撰記をねぐ年寄
用入以下の人二十三人ちどきくみとり

て地の謀のそちの仲うとてむあふ海よたる
らきくらんをとてとてこむい又良きを光善
寺よりさるまのこむふよりてなとてめてあ
な終り

ホ六日庚子ありむづりありあつらまわし終ど
もありの流うしむがうしむくて家のあつりふ

奴ととあしてつうはむう々々不とけり
とくろふのとあね下乳影
せこのきりうるしねり下うけハ水のきさへ
さ之様うつこ人にす之四人もきぬべし
二日大黒屋 のもとふ招う終て例のきくれば
新井と殺し廿九日出ては戸よりきくよし
あり家よるもあきまや何の信てもあしと井よ
う無きよ消息あはともあけ控ハ何のたようも
あしと路るぞと思ふとぞ思ふ
二日ルふハ能より後之能くゆくまべき

のつどいてどがうハけ終とも人このたのむ
所あの控ふ何とバ人トと出くるありらふハ
なるもうへうすこあひ武令ふあはるる家あり
又ある様崎チラサキカと事終り
四日ルふよて誹さく終れのを以て済むふゆきて
去のしものうく夕さやと序之好を十四命とふ
うへうこあひねすよてあのうく新井 柳作之人
来るあまのの送り物あり家あり五月七日出り
ふし来りり終ハ夫ううとくくむ新井あり
の送りあめ又取ふあも送りて家一のむをあむ

秋堂と義
字は山田
徳のり
白石三著

五日川をいづつふしとむるをいりて夕
さり出とつ折舟を一人送りてせはすことある
六日船を及れぬあつて人ことくぬふせり
夕さり船ふりうて路まじきふこさいづ
七日おんどふあるまぬおらの共をいせし終て
いとりのばしきやまうりさ終ハ船のすしあぢ
りりもあいにいとむ
八日ふしあふあふらぐ大え北ハきうけの舟は
しせのあるをこ年日中江行おをらりし事も思
出て

大之の津のゆえよしぬあてつうへまつる
もりぐらふのとめ
九日岩あふらぐ上井諸あのみとよてあからき
又舟のむるのれうし終る雨あうくしせり
十日雨あ終ども出とつりふハ土用あるふいと
そしとあきさふあうも圓あある
十一日をもる富田のハ橋よあうづ中馬を走よ走
しせり終ハ克定福川と道て舟終り伴ひてハ橋
まよあうづはふ終功屋屋のり社うしせのへ
うし終あるとが矢地村原田がり急く山回を疑

申うて先言に四年何ふころへく一五の飛をの
べて女阿へーいいとむらふし

十二日家より程をきいせう一節う何のさをも
をこる

まうさどおへこてさるを干せてうとま

しとあまおるふのをを殺する女と名通徳よてこ

ぶひ伊勢生を宗像に大津の大事すふく川 本

うてうあまをさしとむしと清くあてうるハ

しとあまどとさどろしすあふてもさこまとおむ

思や〜

十三日島海より飛子のくむと出さるるふ雨い

とトウ降出り程ハ山田を殺がり田ふやとる

十四日島海より飛子のうて下買よと〜とむと

すさろハ陸地をり〜むふハ人こめと〜めふ

る〜ゆもころとゆ〜ささのい〜ろる〜あしよ

〜らめのする〜あ〜ま〜殺〜言〜と時むあ

〜飛よのり〜程ど〜西見さろりふ吹てす〜ま

び

十五日に田海より陸よりうてふあよむる市川

のうとよて留ふぞむす致本うる藪とあかりて共よ

五つ
後
折
二

ものごとくすうごうとて小郡政ある古を治まの
もとふある人と悦ぶるやうぞう好し
十一日舟本ふる伝言を舟よすうづ
大とこよふれううてうくおをさむひやうと
舟地しあぬばゆけころを果ふくる一めく控て
政府の人とのあやめうがりとて若しうてお
尾筑おある
十七日差まよすうづこはむうり赤了家竹崎お
るお石資奥の許ありこ十三のありおのもく
しうくさうるもゆめゆとしくるさるハ次

字
月
又

奥の女少倉の初回はよとつぎるよ此不ど男
子をまうけとうつるお先母妻あどて許はいこ
うつるうさのふのうろへりるををぬめてま
くつらあしうバ毒のルが控ふふるづきをるふ
つくあん律よむもほくすがくしうつる薩テ
人エ夏た門言寄はぶあどとておみとおの生
をまあつてくぞらこぶ
十八日ルふハあめうくこ家のとあふ了平後の
もうくよむ控日しとよぎハ一をさるを
十九日宗像の祭アうらあつるののあどまへ

く白名庫進をも伴ひて小倉よりくる浪ハ夕さ
うねく宇流五中ちあのみと少つく西田を去む
来うてとむふおる

廿日晩雪平園のまゝく村上 来うて夕さりま
てあゆぶるさつまよ送るべき文ども送れり
津のゆきよして雪二名の人の又ハけ村とあど
よさつまよ入べき何れかのまうけどもことく
くふ備はりていとく終し

廿一日雨ふる小倉を出てあ終て雨やうく晴と
多終りをるりり来るよむてうごより田舎ある

海部義人の信よつく人と待つらてよろこぶ
うぎりれし

廿二日てまよしるふハゆれりとして迎はよめて
もそまうけども多うり三社とあふこなるも
のハ京ふて梅もさうりとのへといる梅
と五等の家と習代とあうき田村長柄よりも金
のむを三社ともむをさめなるあり午時より未
下卦にむるまで終るなりそのゆきをとして金幣
をうねてとくのへ至れども是人作のりのみ
て面ふうずるも何れもむきと大高司

厚田　よ云入つるよ此中殿よこの井も何る
をえさせしる殊も厚く言し

石井のゆきよあらしと降るよこのゆきを以て
之つるらも千悦びけ言して思ふべし雨いとし
う降と終とも神湊よ出つあ奴花人も伴ひて大
きよよとこるよ直風さううよ吹て叶ふるが如く
よまくりとと此うそ言ハ雨も降らざ大よ司何也
着被まの御もつくまハ初園よあうてあらざう
りせどもまくりあのれが事終る事ハ侍友大候き
みても福ててむあうとて初園よ人を殊文よと

て、若すべく物一へる体おたの飛行志とるも
いとくすまきるあうらう大候あうて大よある
しす

ホ之日中はあの大よ司何也と猪通は来るこい
りてもこはあうりゆ井もあうりゆトよ出て流をと
まのせとあうるを程この井石を乞えてこう言
井といつくるとあれりき

あひうあうしるをへてものうく大候通は終日
うさうらうせり

亦四日以藏小訪んとて大抵乃一を伴ひて出と
つこらしい必そし文仲ふくむとら解て思ひしとし
らく必書とすと傳へとらるるこす日午紀傳子
しるせるむねおお合てうれしきるありルルを
むの石を給はるゑ大はあまをうゑえそと終り
こゝともうあひもすべくおきつしまやれま
を終てさやルうりゆめやゆめの大ふ司の傳子
招うる大抵も伴ひとるふら我はうへくれとり
るるあしきとてうへる何すのまうけよとて祝
詞をくこれハ紀傳亦と是のしりしおかへむと

て終り

亦五日祝詞ハそはふをへて午はゆり岩磯子以
多る皆とあはふはむのほとふ出とらうし其合の
いむらふぬハせとりル傳ハうせしとも何とも
まよのへうとまこくああるうへおおきつしま
さりのゆめくと終りとらては終子を仕なるふ
むいさざよくすししきる云ハうせぬしり世ハ
家うてもとこ日ありたれハ例おまら葉て大抵
をいあつうをむむを千世をへとてたるものあ
らあ子のむおのつらららあのらあようあ合て

いとめで多し

妻と子のむやうめふ息をまつるゆふハ
雲ありル思むゆうまてぬこまりて後世まめく
ゆるるふ自然の夫婦をえこすもをらし

大珠のほと何といし、おんしよいもせの
形何しつ控ふルりうへりる後バ夕を降て心
いさぎよきゆえむ方あしそよひち今のりもきて
人と共ふ收び業しぶるうぎうあし家よきすへ
き五月二日と十七日もるよてえつる文のうへ
うえす又こ家のなぢるあくあしをへさしてゆ雲

をいぬきまつるあしを福んたいろふ云きハす
廿六日ルふハもの多くあしりり冥よ私こよ
きべきよし云るましくふ降衣をことくく送
う又家よきハすべきよべのあともふるうき
すゆとあれう大うとこしゆりハ使がある所か
うり世ハハ月のとよめ大妻司何世通胤が宗よ
よるふへりてきさんと思ひつるをゆくうあ
うる幸よあへるも業しきしと云るはよの信は
を妻よよきハすかふハきのあのをいととてこ
り控バさのこくごくうすむあく遊ふ通流

。

く時村よりハ鰻あじをもち来て大に何るふ
木九日時村子きいすとして千種たがね板梅戸紀
伊予村上在兵衛大殿お田儀紀西村教とよをハ
すべきまゝしゝむさるハけびろのりよありて
東西いとおどやうあゝさうハ行ばるるをハの
びてまゝしめかよあゝとゞは上武 来るこのを
大湯一む剣をもち海りあゝのう代と糸をもつとめ
しうりる人あゝり行ば大に糸もしく思くうち
田東亮がとめお糸あじとくりよの雨風を年お
かほえざるるあてとくくハアノカ水のりある

へー

天地をひいきとよも吹来風おそやお保るゝ
阿ゝしお糸これおんりよのちうへおハ引るハ
うあるお土の大被あるべうりるる

年この地震お何ゝゝるて地のいろ程るゝ如
きさゝしゝとさうじ

七月野々小條時村ハ京お出とあおの程ハ上成
那大庭村おいある竹内を任まぢあゝこぶぢら
ぢうあゝし是地を流あじあゝて大お保るドす
五年阿あゝハ何ド人一人あゝし大陽お加知

比山を望
来る

木ありす妻又女つのも来りたり又去りて
るたちと云ふ荒子ありていとまぎいし
二日ルふハとくめくる大刀を津と云
人々ねて知へありし程は海をもち来り池よ
う程をとりて大よもておさ程とて重任を
しありし程は庭におもむる所を津体とてせ
ある由麻利社をませすつれり
三日出とつ茅島のぼの云をとりて筑後本
去と云ふある雨一ぱくありておやあしき事た
とへんうと那し

四日肥後國了瀬通と云あり柱本と云ふいとる
雨一ぱく降る
五日熊本ある山形典二所向老ふをよりるよ
初ふと出せりつとめて小川と云ふいとる
六日日南久と云ふいとるふ雨いと下う降
ル程ハ浦迄おどしてこふ休ふ
七日に付むうり船を出して申はむうり薩戸
出水部まじやると云ふとて竹添氏よ又つら
てす来るをまさんとする
ハ日出水より伊左回中た門とて人來りて旅

人の政を世の原と云ふてそのすはれもその
ときくしうらざる事ありは終はもくきてすて
まうへくむとせしうども人このとぶるまくと
阿す入とくむふいあはく未はノ上方寺 村と
云ふか紫久利神社くせかひしあしは終は卷
りてぬとなるこの要ありとる方あ人名といる
矢筈岳ふりるおもふむなりて
鬼神も阿は終と思へものいふの矢筈がとけ
もいぬくむま
九月一日とてきて出水よいこる竹流橋と助の

治ふ招くる俸給ハ京賤神は印助伊豆回中在エ
門をどまりて扱ふくるまでありとくす何終
も王定をいふ人どもすて予がいと終るす収ふ
るうさりふし
十日四日ばうりゆきて以久招浦はあるは事原
あよ阿ふは人あり終がさか長崎までありし
いとてぬ終る阿しとつの子はかちどもわくじ
とく思ふと云しをいぬまところると云は終ハ
殊は終しきめのあしとめのがある
たうをて病体むる阿とつづのやあふさきか

ろしく寝る。津盛又青あどもゑて大よ水敷
い麻之崎ある島名伊なり。文あども送程り
十一日雨風のどろろり程どもしひてきて川
白ある水引と云より新田の幡ふよまうづ別荘
杉木の以後ふり程が惚ばしき事共多かり
新田山外芋の川の色のとうり陵の松ふとも
結程るこまひ川をりて隈し城又田子ある
雨いよくつよく降ていつ止べくもとえぬさあ
十二日雨のいとく降るをつとめて出さつ

風雨をさくろりす急ぐん乃のとも思いとゆこ
い旅あゝあゝふせ口をりて行は津あおる坂本
あは神にまかたりあど酒音をうろさへて来る
十二日雨ふる坂本亦ゆもよべの二人の人も本
うて予よあのおどくせていとく風雨の万景
り何るぬきをよろこぶ

宮城のこ山よとてる柳葉ふまうけのあし
そもうい程り申はむろりうまやそく人四足事
ばうりゆきて鹿之島下所あるそ所の田中助次
所のけりまう

十四日ふりこくまうに定めふし徳山休に逢来
る扱ハを了武多うとひてものかご控り何控も
ひ控くしきくすうて大どうあ合ておゆし
こよひ

うへし天のしほれふしやハる千水石をうくと
て大矢ハうつと也又アメリカを

いとくハハハ月日の何めううま大忍し
す外とやハ思ふ又オランダ人けちとこうし
て大輪おのふふどぬるよりしきして
こつぎハハ何をめさぐむ大車のおるおえ多

つよふろハの忍

五日めつうう晴とゆる程どもむすが如く
していとあつらりル程山を了の人と来うて
おぼるりふハ中之としていとがううし
あじハい福もやし控ぬだうりよあむ

およていまいたえふるてあうをばうと
那控るふよこるう茶

十六日ハさ中羽の忍身うせこあひぬるあしき
してむねつふるこの君あことふふし
くわいしあして 終るあしめ御あしめ

もしいとあこしくかひしすしう控バ大名とま
り中もても一人とらひるくむううきよもやさ
せう控とまふるをあこしくも云も中とあかま
しとあつらへちまれり一人のむおもひやるべし
て下人のあひきををしさずややうくるも
はよこちよ控何り控はたふハ林何かしと云ふ
ひがめの有てまてよころどましまあもうつ
しなむむふどさるるおまこしめしてあは備ど
このゆまうけかひし又墨巻もうつべき密
策をちゆう又西丸のともよつきてハ奸を記何ん

をえむとせう控ゆるよ一橋公をすめりさ
ふとすべて天下のち儀ふハは君一人をたの
こめせるゆとさあえしをいとくうふしと云も
やうぬうすでおちの控が来る事とも西の吉原
と云よりとて下まのせかひしおしるるとり
殺とめむといとあこしくし

十七日後控見せむ控来くる島名何ち門がかりゆ
きてねえ善五所を回ほよあど来うて大このの
ぐとすはぬののまあびおのううをえてい
とたのめしき人あり

十いゝ後碓氷を伴ひて何南原迄が別業ありぬ
るハ田知紀来う々控バ出テ子立あり五月十六
日小文取とりし清島とむとを後すげ人ありこ
よ子路ふしうふハ人二十人むり来りル控バ
祝物と海す又ふ控出流うとぬ小古哥四てよし
てあり人とぬれぬどろくすうざうふしハ田氏
の龍岸一徳をも下めてくるせ流ふ万葉考如茂
編も
もあふ
十九日あも島めぐりゆきて後碓氷ハ田の人
ことうとふ又人といとまアしふ来れぬ山きり

ホウ宝珠院山田家一節あど尋こいぬ来控りこ
こふえし世ハハ月廿六日頃よりぬえふむるよ
ありりふバ物あど家よきハすとして島名しこと
めさせつを由よりくるあありてぬ花芝葉の毛
あうく明石路京とさすの来りて自石よりたよ
控つる中意とより控バされつとして出つ控山
を伴ひて伴生控ふつく板木たけ父を来りて例
の阿るドせり
廿一日きのああり雨ふる隈し俣子あるすうら
きりたとあるあもりのぬし

廿二日 既又板もつく 河内 板心^{板心}来りて 阿すふん
とどまうせの人と云すくむるおし其をよほへ
り
廿三日 くらふハ 宗像 板の 板心^{板心} 阿へ 阿す
さの 板心^{板心} ぐり ゆきて いらう 阿す せう
廿四日 板とくきて 出ぬよむる 竹添 板心^{板心} 来り
て 阿ふど 出す 二よむ 来はより 板心のりて 阿が
とをく 日南 久よ 志く
廿五日 板をうけて 板心^{板心} 阿へ 阿す 川内 板心^{板心}
り 雨又 阿る

廿六日 板心^{板心} 阿へ 阿す 山形 板心^{板心} 次 阿へ 志く け人い
板心^{板心} びて 板心^{板心} 阿へ 阿す 一をよむよきハ 一人を
て 大ふ 阿る せう 阿へ 阿す 六月 廿二日 廿四日
とも 小ふ 阿る 大ふ 阿る 阿へ 阿す 廿九日 廿多ふ
て よむ 阿へ 阿す 一をよむ 阿へ 阿す 阿へ 阿す 阿へ 阿す
廿七 廿八 廿九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

あつりりさ我どもけとびる 勅許ふい阿らさ
うりるこり謀り天下の幸と云へきものありル
我後せ且利義満と共に筆誅せらるゝものハ大
將公よあんけらるの死ふい阿らざり我ども奸を
多く權威をこりて終ふハ公を名滅ふあしなる
あむいと氣うとききりありらるせ五月ふい阿ら
殿ナニれして西丸ふ入るせし終とらとら又ハ
水地土位とと云ふもの、奸謀て、つひとるふて
梅川の流水とあむおつるあるべらるゝ一々
子あざりて一橋殿ハ用門屋か殿水戸殿御あさ

及ハ隠れけし終場田信やるおま伊勢まハ逆
けし終を凌駕する川土位やハとらをきりも
十ハハ古田信はるり終下終をねまお泉る不司
代中多中ねか小幡をうして河井清波ををあそ終
らるどぞ

としハあさといくも阿らぬるとくハ 水と
とゆる味来るゝし人こふ云べくも死ハバうい
つくね原惟一がりむるけ人大坂に在つるおど
ハ謀りしとしき中の人とあうゝとるあもいと
おむつまどく文ふ家なる國をあむあせりル

るけ人の之松田山一仰とせよ阿らあーらバと
奈ルく

ホ七日ね原氏と二返字をとるけ人解体おハ殊と
くりーくして登明のふどもまうりり控ハ平ぢ
日中記傳をもとせとあうらるけ人天下の返ふ
るべーふろく裁くも平多うりり山形氏お山

川花荒木

欠方あ回

おど

来うて古そのゆともあうらるけ人おふくるあてほ
ああちこの一をもめてこ人のあまきよろこび思ふ
べし

ホハ月ルふはうらるる人ほえふおのするよ
しあうり控ハ家よせうらこせりいとよきこよ
うあうり控ハうれしきあなと一むよあめあし
ことび字像のゆ体ゆるハ事ありしうども
蓋障ふてハ志といとさしかりるをゆくいあ
は然をおてるの起れるも祿のたまりありル
りと控ハうらり控ハま人のとむむるおま
せつしうねどもあうらぶうんとするはありル
ねバいとささうらうらとあまのむねよひ
お回やうて

ムーササヨモ〜も〜も〜

四日筑後國以井郡片之原と云ふところありてハ
筑後川のちとりもて思ふ阿とありハ僅ふる本
とあるどもむよまらせず又乃もて

くく國のよさーうけいむす花ふたとりあさ
くぬ大さあがゆ

天下臣のまよりのまよてもあひくぬせとハ思
ひーくすや

くくあのとあーあひまろくく程もあひくく
あひくくやこの國

世人のむいり程るつものあハ木の程と家の
てふあろくし

くくあともは内本あつき本ハ大樹の
けも阿やあろり也

五日林田村ある美奈谷社ありつはハ社ハ
あ村名ありのこ程ハ彼^{美奈谷}村あるあむるハ

あるべきと程と別社進まのたよてハまべきあ
こ体むりり行内五郎がト大庭村の宅よつ

くけとも程多ああのをせ〜程とるとよべあん
へうつきぬるとそりハ程ハあまてこ〜あ

おとすもこのまふころと神のこころにさの
うーこまを思ふもあく何くも9のまいたてか
葦原のまのころううてたかひあけあめ
どもちぎさる多うだまおも元もさるさ程
ぬるのこねり

ふる古契この何す子左京上原左様おど止と来り
てーバくとしむせ日いんすをこへりふの
何んさ場かーこ京木神と
七人く多く来りて鮎を何す送るべきずー云
り祝詞式の傳せちをもしむきく人十四五人を

べー何すハ神祭つくりまふむとてむいとまふ
一馬川村大行り神社社へ懸懐山博古毛村惠穂
八幡ま上原陽村池田村杷本太明神社司神及河
内さ久喜ま村山王ま吉田常陸田村大行り社
懸抱丹後志波村志満ま小寛大炊入地村陽加神
社葦原恰星丸村ハ幡ま上原采女お小河内さ神
神及左京山博神懸懐織原おとりの人くあり
口竹内重任と云合せて 宗像大神を祭り
まる懸地杵築う千植鹿嶋香取ト道神と又お松
神を招きりて大いうまいーくはま松り取我神

箋天朝柳營の雲箋をもひかりて大ふをささむ
るふむぢり上は即よりの本行を辨く共も皆つら
まるいとみきいししりせは非もさころいれ
とゆきりめと思ゆるむうをぬり例の講せさす
筑後不着る村表もい幅ふ非も安え紀行来水り
この所々の生葉もあの古趾ありけると云り
九口ぬいさしう雨ふぢりあえ紀伊らわん筑後川
の阿用を送りし程バ
千代川のうくひの阿用もちよへさつらふる
せ阿くハ何う思ひむ

十日雨一ぱくふりて大くすしータさしり
後ふまうて大くものうしりはまのふりふ所こ
よりの阿用をむしり
十一の地村ふる物奴非社よまうつこハ水派
より字はまうつせのふ休のこやびり所とあ
むなるてころびて土をよきうとりル程ハ
国土もよきいるいりりの午カを君らものりハ
あさしてつるへい
あさしてつるへい
ておほふのやのものと大ふ小幸あしおせむ大
ゆゆると又をよりの大カハ情ふまうでまじり

はふ神印皇居の山を刀まうつーとまうのしふ
とふむ云ふ

土の下底よりある神土刀乃むうりうや
く神社う池こまひ海邊をへて人々を其所より
へる別をある有り

十二日出とつ重任の女を伴ひをとしむよの若
神の洋中ふと伴ひ大宰府よりうつねる神と
云ふあるなり

一このしつ神の何あぬまこりけふいおふじも
くせる隈ふるるるるに園後ふもく移て来り也

めともふあうところ

十二日迄素に波より招う終わく 若神乃以

字海をえなり又其のあいもて 水社より

て天をををいめて定刀をことくくえある大島

兵部と云人も何一り其を信を龍門山小代と

をいこさせつうけの水をゆかりてのむ

水元のむもゆりふりくとこり光とわらぬ

橋うけの水部屋橋の御観音をえめぐり水

塔をえて懸て井ある洋やけうていこひ特多小

わく

十四の位者を召置ある 宗像の遠野所まきし
て何す侍むるをも云へりりるふ太ふ司はハ
り小位位り阿すあべりこわての位宗あると
りし宗せりり侍よつせてもハのよ宗位り宗
よて其の宗つりりをぬりしハ月夜出をの位宗
とふり何位侍るるハすておを二年まはる非剣六
月よすじくうりり一侍あどをなるんハ南位
るハ非とまの位あいとたのぬりりり侍しきハ
るありりりりり田原花を村千秋に上宗し進あど
進しありり侍る。

十五日より一より雨いと一雨り笑崎まの放
せ今あるふりりり侍ハあまきりあがけをきか
ど蘭人をのしりせりりりりりりりりりりりり
びありとくこの云阿するハ自然津の位とあら
んりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
くよありこびりのよどとりりりりりりりりりりり
者もとりりりりりりりりりりりりりりりりりり
ハ宗あるありりりりりりりりりりりりりりりり
代の金をとりりりりりりりりりりりりりりりり
御前ふたて額をかぬむりいとぬんころありそ

ころハ彼剣ぬもさしけもれむとむゆうひ
てしぬバ一まハルふおころてさり阿一ぬむお
りルり雨りといとしう神ル程バ

おまつしおまはくしもお土のルう程まぬ
ふらぬのむしさぬルふうりうらる世中おが
くさばらおまぬしさるハさあきさも死はくし
お任といとく摩まよしまておもころおねを
程り

て望の程のしおのうつおまおらつくせう
しこふる河ふいとつらハしや

皆人のむこと合ひておのこてつらふる
程のつそつも土エ程と云人の七十おふ

おまを思おまよくつくるおよハいもいう
おらせさるべきち田まてを村千輝うめお
程約をとく

十六日雨おりル程ハといおする不ニ云

又おのうあそこあふこむうへてむおひ
ておの大山こよひち田お行て竹内ちおおの
人しと預る土おとさ人と廿二おありるお阿
お瓦をえさせころふる席篋ルお二巻へおたる

よーいなる

十七の土三新山行二板の社神の石像をおむ

年まねく世は地を焼く身作りのうらたうらた

くハルみりり神お祈て口女島あり出こり神

道規を以て下りてえりり神ハ

大恩のいけおつうふるこすあひとけくるハ

ふりこいおののうも市人の武士ふおれるふ

市所といとあしりきたらひをうたふあ

へてせをささるる〜兒は利必サツマ人の賢

毛いさみやあまここと一むとましくもえりけ

ハうつものありある大に阿る〜せりて

うへるあまてはる廉策は阿ふを従ふり人こふ

別る廉佐竹内土三新美崎と送行り名島吉崎并て

ふ訪て香荷大ま司のむと〜

十八日朝に不志水を呑む其もとして山景物

をえらり香荷ふりり〜づ續杖を大ま司より給

ハ給り

ハ十那の夏め〜くえた〜むめゆその如く

あ〜せて〜り形又

う〜むぐのこあひ〜何の時ハ阿れとせも

風のこゑがめづかしいぬくくふは吹のそ中の
まよふ出もあやうきういづつまはるうよこえ
たさる

沖つしまやふとあびききりめいまはとさう
まよふもともこむ陣や十町のほたあの大島
あで海つらう出とりの行ども物いとましく
ありてまもむせざるよふ空いとさう
さくくしとねばはうえさるも陣のほむらとて
旅をすらの夢のうさありて陣ふたへまぬ
さしろしあしあけと云もやとあう赤うふある

十九の雨のこゝろ降るり終ともつとめて出
とつ四里ばうり小倉の湖と云ふて物いかに
しるこたり

大つおをばつとるぬく雨ふれど宗海いそ
るくくしとあうす毒ばうり小倉ある守死
氏よるる

おも山をを採まうてものうく木甘ハ病ありと
て出ま若るもあま採り午時むうりまやまらん
小倉ありぬとうけてあるへさくうと病ありま
あていどくともまけり

第一 一巻の女ともいふ名ありこの終るべき
あどものくくる家より五月十八日六月十九日
生りあつてあつちりせつる大崎より出せ
りしふとども降りてきり終るともお出すべく
思ふゆゑさへ家よりふとをいすことよりあつちり
及みあつちり終る一も終るあるおちとあつちり
いす



